

氏名	たか はし まさ たち 高 橋 正 立
学位の種類	経済学博士
学位記番号	論経博第89号
学位授与の日付	昭和63年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	〈日常性〉からの経済学 ——《経済の限界》——（経済本質論序説）

論文調査委員 (主査) 教授 平井俊彦 教授 伊東光晴 教授 菊池光造

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、従来のさまざまな経済学の理論的枠組を取り払い、また、現代の資本主義と社会主義といった体制的差違を一たん取りはずし、本源的に、人間がこの世界で生活しているという事実のなかから、経済の営みとは何か、また、経済生活は人間生活のなかでいかなる位置にあるのかといった問題を考察する。そのことによって、経済学ではなくて「経済」なるものを、その本質にまで遡って究明し、そこから改めて経済学の課題を省察しようとする「経済本質論」を提起したものである。

ところで、こうした問題提起をするのも、資本主義社会と社会主義社会のいずれもが、空間的に世界市場を場に相互に交わり、同質の問題をかかえている。昨今、驚異的な生産力の発展の結果、有限な自然環境の一定容量という壁にぶつかり、効率的に経済の営みを行えばそれだけ、経済の存立基盤が脅かされるというディレンマをかかえているからである。ここで人間と自然との物質代謝の過程としての経済の営みをその本源にまで立ちいって、歴史貫通的に考察することから、改めて経済体制の比較検討を行う必要があるだろう。

まず、「経済とは何か」を問う第1部は、4つの章からなる。方法論のレベルでマーシャルとロビンズとの経済認識が対比され、市場を軸としてポラーニとハイエクとの経済認識が対照されている。マーシャルが経済行為の目的と手段との内実に着目しているのに対し、ロビンズは行為の形式を重視するという相違はあるが、ロビンズの経済像もその内実はマーシャルのそれと重なるものである。また、市場を最善の制度とみるハイエクは一見して市場以外の制度でも経済が可能とするポラーニとは異なるとみられるが、市場への関心が個々の経済主体の生活関心の存在を前提とする点では、両者はきわめて近い、と論じる。

こうした従来の経済理論家の経済認識を考察したあとで、論者自身の経済の定義が提示されている。このばあい、一つは、混沌たる現実のなかから特定の事象群を経済として選び出すとき、認識関心が重要な役割を果たす。経済関心とは、日常生活の維持・充実のための手段の確保に向けられる関心である。だが、経済がいかに主観によって構成されたものであっても、その素材は現実の中から切り取られたものであるから、二つには客観的実在そのものが問題となる。経済とは、生の営みを表現するために必要な物的手段

にかかわるものである。以上の二つの要因から、主体とその関心対象を媒介するものとして、(1)手段の要因、(2)技術的な要因、(3)場所的な要因、(4)時間的な要因の4つが考察されねばならない。このばあい、重要なのは、経済と技術との関係である。論者はメンガーに依據しながら、両者の区別と関連を詳細に追求し、結論として技術的過程はそれ自体としておこなわれるものではなく、これを選択し組織するものが経済である、ことを明らかにしている。

ついで第2部で「行為としての経済」が取上げられている。ここでは希少性という条件によって制約されてあらわれる経済の側面つまり配分 allocation が問題となる。この部門は、「人間と自然、および経済原則」、「配分概念とその諸契機」、「欲求から配分目的へ」、「配分決定—選択と費用」の4つの章から構成されている。論者の経済認識によれば、経済の基本的形式は、生活上の諸欲求を充足するための資源配分である。この資源配分とは、主体の抱く量的に無限定な諸欲求のそれぞれに、主体の支配下にある質的にも量的にも限りのある、しかし代替的用途をもつ諸資源を、質と量を特定して割当てることであり、その原理は主体の生活充足が最大になるように図ることである。

そこで一つには、経済学では通常自明のものとして前提されている人間の欲求とは何かが、問われねばならない。論者は大熊信行の所説によって、人間が生命体として自己を維持すべく環境と物質代謝の過程へと導く原欲求から出発して、欲望と必要とを概念的に区別し、両者が結びついていかに「欲求」を形成するかを、明らかにしている。ついでこの欲求がいかにして充足されるかが考察される。もちろん、ここでの欲求とその充足手段とは歴史的・社会的に変化するものであって、固定的なものではない。また、欲求の大きさもその種類によってさまざまである。このばあい、欲求の充足手段として外的対象物と並んで論者が最も重視するのは、「労働」である。欲求の主体は同時に労働の主体でもある。ことに労働は一定の限界をもつものであるから、時間的に労働をどう配分するかが問題となる。

ところで、本論文独自のユニークな視点は、大熊説のように労働は単に時間に還元されるものではなく、一つには、主体の快樂・苦痛といった質を伴うものであって、この生活者としての労働の質的要素を重視し、費用論として展開していることであり、二つには、欲求充足も個別的・短期的に考察されるのではなく、長期的なライフサイクルで人間がいかに資源配分を行うのかといった「総体的充足感」の視点を提起したことである。

第3部「過程としての経済」は、「生活過程の再生産—財と労働力に即して」、「個体・家庭・社会」、「社会と家庭の間」の3つの章からなり、付論として「教育—労働力再生産の一要素」が加えられている。従来の経済学が主として財再生産を問題としてきたのに対し、論者は人間の生活過程の再生産こそが、経済の原点であることを明らかにしようとする。今日、生産活動が活発になるに伴い、自然や人間活動が社会的再生産過程に組みこまれていき、社会内部にさまざまなひずみを引きおこしてきた。これに対し、人類の再生産こそが問題だとみる論者は、家庭の役割を強調して「家庭経済学」を提唱する。

従来の経済学では、主として家庭は社会経済システムの一つの単位としてしかみられなかった。だが、家庭こそが人類という種の存続の原基形態である。マルクスのロビンソン物語、およびそれを援用する大熊説が1人のロビンソンの孤島の生活を出発点とするのに対して、論者は夫と妻1組のカップルの「ロビンソン2号」を登場させて、家庭という共同体内部でどのような再生産が行われるかを理論的に追求する。

論者がこうした家庭を重視するのは人間の生存の原基形態であるのみならず、子供の養育・教育によって次世代の労働力の再生産の単位をそこにみているからであり、教育経済学の提唱もこの系列のものである。そして論者は家庭という場で行われる再生産を「家庭内再生産循環」と名づけ、他面で複数の家族がある共通の意思のもとに共同の生産にたずさわり、財貨を通じて一定の関係をとり結ぶとき、それを「社会的再生産循環」と名づける。これら両者が各々の特色をもちながら、二つの側面がどう統合されるのか、ここに「経済本質論」の新しい課題があると提唱するのである。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、大熊信行、杉原四郎らの問題提起をうけて、わが国の学界では異色ともいうべき経済本質論を、生産力の大きく発展した今日のグローバルな経済社会状況のなかで、改めて再定式化し、その理論的展開を試みた業績である。そのために、さまざまな従来への経済認識が幅広く参照されており、また、他の諸社会科学的認識にも論及されている。それだけに、本論文にも問題点がみられるのであって、たとえば、論者の引用するジェボンズの労働費用論の援用にしても、一定の限定をおく必要がある。

だが、本論文は従来、ごく少ない研究者によってしか考察されなかった経済本質論の分野にあえてふみこみ、ことに労働配分における質的要素をどう導入するかといった問題や、これまできわめて抽象的な指摘にとどまっていた家庭経済学のなかで、家庭内再生産循環の構造を具体的に展開して、経済本質論の研究分野に新しい段階を画した。よって、本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものとみとめられる。

なお、昭和63年4月21日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。